# 「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」
# （課題設定型研究領域）研究概要

**研究テーマ（領域）名**

人文工学の方法による人文社会科学の実質化

**責任機関**

東京工業大学

**研究実施期間**

平成 21 年度～平成 25 年度

**研究プロジェクトチームの体制**

| 研究総括・グループリーダー・研究分担者の別 | 氏　名 | 所属機関・部局・職 |
|---|---|---|
| 研究総括 | 徃住彰文 | 東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授 |
| 研究分担者 | Leith Morton | 東京工業大学・外国語教育研究センター・教授 |
| 研究分担者 | 井口時男 | 東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授 |
| 研究分担者 | 高岸輝 | 東京工業大学・大学院社会理工学研究科・准教授 |
| 研究分担者 | 赤間啓之 | 東京工業大学・大学院社会理工学研究科・准教授 |
| 研究分担者 | 村井源 | 東京工業大学・大学院社会理工学研究科・助教 |

**配分（予定）額**　　**単位：千円**

| 平成 21 年度 | 平成 22 年度 | 平成 23 年度 | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 |
|---|---|---|---|---|
| 3,100 | 3,300 | 3,300 | 3,420 | 4,320 |

**研究概要**

**研究の目的**：　文学をはじめとするテクストの研究を人文工学の方法によって革新し、人文・社会科学が主観的解釈の無限ループから抜け出して、科学的事実の蓄積の学へと実質化することができるように方向づけることが目的である。具体的には、本研究は、どのようなテクストにも含まれる各種の構成要素（単語、句、節、文、意味要素、概念、要点、意図、修辞特徴など）を、他のテクストの構成要素と自動的かつ探索的に関連づけるソフトウェア・ツールを提供する。ここでいう「他のテクスト」が、歴史上に存在した全てのテクストを意味する時、テクストに基づく人文・社会科学は、一挙に爆発的な規模のデータに基づく論証が可能となり、革新的な段階に入ることになる。テクストの電子化は、国策（日本国立国会図書館、フランス国立図書館、韓国国立ディジタル図書館等)、企業と大学図書館の連合体（Google Book、Amazon、 Microsoft 等)、草の根（Gutenberg、 あおぞら文庫等）など、多層的なレベルで一挙に進みつつある。この動向に完全に対応する分析ツールを、本研究は提供する。インターネット検索ツールが世界中の Web サイトに対しておこなっているのと類似の機能を、本研究の人文工学ツールは、世界中の全ての書籍、論文、テクストに対して、学術研究に寄与できる水準で提供する。

**研究方法**：　人文・社会科学におけるテクストの学術的研究において、分析単位として用いられる構成要素を特定し、それをオントロジー（辞書的データベース）として構築するのが本研究での中心的な方法論である。具体的な対象テクストから、このオントロジーを経由して、全テクストへの検索をおこなうのが、本研究の成果として提供する人文工学ツールの機能である。文字や単語を単位とした検索だけではなく、意味、解釈、概念、語用、修辞といった高次の単位による検索を想定している。またオントロジーの開発を、全世界の研究者間で協同的におこなうことを可能とするために、普遍的な中央集権的単一オントロジーを構築するのではなく、分野・文化・歴史・地域への依存性を忠実に反映させるような、数多くの下位オントロジーの集合体を、分散的に構築するという方法をとる。

**研究計画**：　［初年度］すでに構築済みのオントロジーと、人文工学ツールのプロトタイプをもとに文学、批評、歴史分野のオントロジーを研究の実用に耐える水準に拡張する。［第２年度］オントロジーの分散構築をサポートするシステムを構築する。世界中の研究者がそれぞれのオントロジーを持ち寄って、協調的に使用することが可能となるようなシステムである。［最終年度］日本文学、比較文学、美術史分野のオントロジーをひな形として公開し、テクスト分析ツール、可視化ツールとともに全世界を対象として公開する。

**期待または想定される成果・波及効果**：　本研究は、直接的には文学、美術分野のテクストを対象として開始するが、テクスト分析を主要な方法とする全ての科学分野に、ただちに応用可能である。すでに構築済みのツールでも、宗教テクスト（聖典)、政治テクスト（マニュフェスト）の分析などでその効果を検証済みである。テクストの電子化が全世界的規模で急速に進展しているのと相まって、本研究が提供する人文工学ツールの重要性は極めて大きなものになると予測される。